この矢に全てをのせて

音羽中・２　松本　淳

四十分ほど車に揺られ、蒲郡市民体育センターに着いた。今からいよいよここで、東三河大会が始まる。

今回の大会では予選で一チーム二十四射のうち、男子で八中、女子で八中すれば、決勝戦に進出できる。決勝では一チーム十二射で当たった数により、順位が決められる。個人戦では、八射中男女ともに四中以上で決勝進出、そこから当たった数の多さにより、順位が決められる。

まずは、各学校の控室に行き、準備を始める。袴を着て、弓を張り、矢の羽の手入れをする。安井先輩が、

「準備が終わった人から行くよ。」と言った。掛けを着けた後、弓と矢を二本もって弓道場へ行く。

弓道場に着く。矢が的に当たった「パァン」という音が立て続けに聞こえてきた。

「すごい。」

と、思わず声がもれる。列に並び、ついに自分の番になった。的場に入り、深呼吸をする。弓を立て、矢をつがえる。弓を引き、狙いを定め、手を離す。……外れた。二本目も同じように射る。また外れた。今回の大会はダメかもしれないな。悲しかったけど、そう思った。

控室で、安井先輩、宮本先輩と話した。これからの予定を聞いたり、的に当てるためのコツを教えてもらったりした。一時間ほど本を読み、勉強して心を落ち着かせて待った。

「音羽、男子Ａチームは移動してください。」

その声を聞いて、僕と先輩二人は移動する。弓道場に近づくにつれて、先輩たちも口数が少なくなってくる。きっと僕と同じで緊張しているのだろうと思った。椅子に座って自分の順番を待っていると、自分でも分かるくらいに心臓がバクバクと大きく動いた。自分の番になる。足を開き、矢をつがえる。的を見てねらいを定めて、射る……。

「パァン」という気持ちのいい音がした。「当たった。」と声が出た。先輩の矢も当たっているように見える。二本目も一本目と同じようにねらい、射る。外れた。三本目も射た……はずれ。決勝に行けるとは思っていなかったけど、どうせならやれるところまでやってみたいと思った。四本目は必ず当てる、と意気込んでいつもより長くねらって手を離した……当たった。一本目と同じような音がする。チームで当たった数は合計三本。弓道場を出る直前、神棚に忘れず、礼をした。

弓道場を出て、先輩たちと一緒になって喜んだ。弓道の大会は待ち時間が長い。また、四十分ほど控室で待っていた。その間もずっとドキドキしていた。前回の市内大会は、八本射て一本しか当たらなかったから二本当たっただけでもすごくうれしかった。たったの四十分が一時間も二時間もあるようにもあるように感じる。練習や一回目に射たときと比べて緊張感はなく、「早く自分の番が来ないかな。」とずっと思っていた。本を読んでいると、移動してください、とアナウンスがあり、弓道場へ移動した。

今回は先輩たちも明るい顔をしていて、弓道場に着く直前までいろいろなことを話した。席に座ると、期待からか緊張からなのか、手汗が出て、心臓も大きく動いた。

「始め。」

大きな声が響く。その声とともに席を立ち、前に出て、足を開く。しかし、どうしても緊張して手が震える。深呼吸をして自分を落ち着かせる。矢をつがえ、弓を引く。目いっぱい引いて、引いて、ねらう。八秒ほどたって手を離す。風を切る音がした。一秒もたたず

に、聞き慣れた気持ちの良い音がする。的の中心から左上に当たった。すかさず二本目もつがえる。一本目を射た角度を思い出しながら、弓を引く。手を離したあとすぐに「スチャ」という砂が矢に当たった音がした。外れ。三本目も同じように外れてしまった。先輩たちや他のチームの人たちは当てているようだった。深呼吸をする。矢をつがえ、目をつむる。神に、祈る。どの神なのかは分からないけれど、ひたすらに祈る。弓を引いて、ねらう、ねらう、ねらう。手を離した後、「パァアン」という大きな音が鳴った。周りの音が数秒間聞こえなくなる。喜びのあまり鳥肌が立った。弓道場から出る前に深く礼をした。

弓道場から出た後、先輩に聞いたところ当たった数は、チームで計五本だった。チームで決勝へ、僕自身も次戦へと勝ち進むことができた。控室に戻った後、みんなで喜んだ。昼食の時間になった。弁当に入っていたのは、ちくわやからあげ、ピーマン、レタス。疲れてお腹がすいていたので、よりおいしく感じた。決勝では「坐射」という、座って的場に入る方法で射る。ほとんどやったことがなかったから昼休憩の間に先輩に教えてもらった。休憩が終わるまで坐射の練習をした。女子チームは当たった矢の数が足らず、決勝に行けなかったらしい。それもあって、鬼頭先輩の「がんばって」という言葉が、やけに印象的だった。それから少しして、「男子チームの決勝に出るチームは移動してください」という呼び出しがあった。先輩と弓道場に向かったけど、緊張のせいか会話はほとんどなかった。

弓道場に着いたとき、矢が的に当たった音が絶え間なく聞こえてきた。席について周りの人を見る。予選のとき、多く当てていたチームの人たちが目に入る。自分よりもっと、もっとすごい人たちと戦えることがうれしくて体が震えた。自分の番になり、坐射の作法を思い出しながら的場に着く。矢をつがえ、足を開く。弓を目いっぱい引いて、手を離した。一射目、外れ。二射目、三射目、外れ、外れ。焦りで唇が震える。頬に汗が伝わるのが分かった。四本目をつがえる。震える手をおさえ、弓を引き、手を……話す。「シューン」という音が少しした後「パァン！」と大きな音が辺りに響き渡った。予選よりも当たった数は少なかったけど、とてもすがすがしい気分だった。決勝戦で当たった数はチームで二本。二十二チーム中、七位となった。

僕は予選で四本当てられたから、同じ四本当てた人と個人での順位決定戦になった。先輩の応援を聞きながら、弓道場へと向かった。自分の番になり、いつも通り弓をつがえる。これが今大会で最後になる——そう考えて、弓を引いた。この矢にすべてをのせる気持ちで、手を離す。「スチャ」という乾いた音がして、風が吹く。矢は的から大きくそれて左上に当たった。だが、不思議と悲しさはなく、とても気分がよかった。

少しして、表彰式が始まった。運営をしている先生から賞状をもらった。そこにはこう書かれていた。

「弓道男子個人六位」